



沢田内科医院 ニュースレター

第 60 号

沢田内科医院は開業15周年です

10 月 16 日で開業して満 15 年が過ぎました。大学を卒業後、勤務医として 18 年、平成 7 年に開業してから 15 年、合わせて 33 年です。幸い健康に恵まれ、大きな病気もせずに仕事を続けてきました。実は、33 年の間に体具合が悪くて勤務を休んだことが 2 回だけありました。『先生は病気をしないんですか?』という人がいますので、私も具合が悪くなることがあるということを書きます。

最初は、大学を卒業して 1 年目でした。お腹が痛くて、指導医だった清野義郎先生に、「お腹が痛くてダメなので、帰らせて下さい。」とお願いしました。その時、清野先生から、「ちょっと来い。」と別室へ呼ばれました。清野先生はいつもの口調で、「沢田、お前、勘違いしてるんじゃないか?」と。私は、「・・・・・・?」。清野先生は続けて、「患者さんはみんな、腹が痛いから病院に来るんだ。それをお前は、腹が痛いから家に帰ると言うのか。」と。そして、胃の検査のために透視室へ連れて行かれました。透視台に載せられてバリウムを飲まされ、「右第 1 斜位 30 度」などと言われても、どっちを向いたらいいのかわかりません。現像したレントゲン写真を見ながら、清野先生は、「神経は太いようだな。」と。見ると、胃のひだがすごく太かった。結局、家へは帰らなかったのですが、仕事は休みました。今は亡き清野先生の思い出です。

2 回目は、青森県立中央病院時代です。学会からの帰り、

飛行機から富士山が見えた時に、キューンと耳に痛みが走りました。その時は耳が詰



まった感じだけでしたが、青森に帰ってから耳が痛くてどうにもならなくなりました。中耳炎でした。鼓膜を切開してもらい、初めての自宅療養でした。今は弘前市内で開業している耳鼻科の先生から、「鼓膜切開して、まれに穴があいたままの人もあるんですよ」などと切開してしまってから言われましたが、痛みは軽くなりました。耳が痛い则ち集中力が全くなき、新聞や本を読むことができず、ラジオも音が頭に響いて聞いていただけでした。24 時間ずっと眠ることもできませんから、ベッドの中で痛みをこらえながらただ時間が過ぎるのを待つだけの数日でした。

開業した後は、幸いなことに健康を害して休んだことはありません。ただ、「患者さんよりも私の方が具合が悪い」、と思ひながら診察していたことは何日もありました。医師になって 33 年、私の医師としての人生も最終コーナーです。気力は十分あるのですが、体力がどこまでついてくるかが問題です。これからは、5 年程度を一区切りに目標を掲げて続けるつもりです。あと何区切りあるのかなあ・・・・・・。

西目屋中 福田珠未さんが職場体験

11 月 9 日から 11 日まで西目屋中学校 2 年生の福田珠未(たまみ)さんが沢田内科医院で職場体験を行いました。弘前四中からは毎年来ていますが、私の母校である西目屋中学校からは初めてです。

珠未さんは、「おたま」と呼ばれている明るい中学生です。バレーボール部のキャプテンを務めていますが、何しろ部員が 5 人しかいないため、対外試合の時は吹奏楽部から部員を借りてきて出場しているのだそうです。

14歳の中学生がたった一人、知らない大人に混じっての3日間です。いつもの常ですが、患者さんと呼ぶ時には大きな声が出ません。しかし、さすがキャプテン、「もっと大きな声で呼ばないと聞こえないよ。」と言うと、その次からは遠くからでも聞こえるような声が出ました。それも初日にです。

さて、生身を相手にする医療機関での体験ですので、見ることもやることがすべて初体験です。私たち医療機関で働くものにとっては日常茶飯事です、おたまにとっては未体験ゾーンです。まず、頭を打って傷口をホッチキスの針で縫った患者さんが来ました。この生きた皮膚に刺さったホッチキスを見たおたま、後で井上婦長から聞いたのですが、目を背けたようです。

外来患者さんの診察を介助している途中で、胃の内視鏡検査を一緒に行いました。鼻の穴から内視鏡を入れます。食道に入ります。続いて胃の中へ入ります。もちろん目に飛び込んで来るものはおたまにとっては初めてのものばかり。テレビ画面を見ながら説明して検査を終わりました。内視鏡を抜き終わったその時です。私の横で、おたまはグラグラと床に倒れてしまいました。

「女は男よりも度胸があって強い」、と思っている

私の偏見は崩れてしまいました。中学校の先生をしている友人の話では、修学旅行で遊園地に行っても、ジェットコースターなどのスピード系の遊びは女子はキャーキャーと喜んで楽しむのに、男子はやらないんだそうです。これまでの職場体験でも、内臓を見て顔色が悪くなるのは男子だけでした。おたまが倒れてもここは病院です。ジュースを飲んでちょっと休み、すぐに職場体験は再開です。井上婦長も看護学生時代に、手術中にアキレス腱を見て倒れたそうですから問題ありません。

私は40年も前から珠未さんのおばあちゃんを知っています。おばあちゃんは、受診しなくてもいいのに、職場体験期間中に患者さんとして来ていました。きっと心配だったのでしょう。14歳の女子中学生の珠未さん、大人の中で大きな声を出しながらしっかりやっているのに、赤ちゃんの時から面倒を見ているおばあちゃんは心配でしょうがなかったのでしょうかねえ。

珠未さんは、薬剤師になることを希望していますので、医院の仕事の中でも薬局に興味を持っていました。薬をそろえたり、薬の袋に名前を書くという外から見える姿は薬剤師も中学生も同じです。でも、同じように見えながら、薬剤師が頭の中で考えている内容は、今



左から、小堀未希さん、おたま、井上真利子婦長

の珠未さんが頭の中で考えていることとはまったく違います。患者さんのこと、薬のことなど、仕事の内容を知ること、見た目が同じでもやっていることはまったく違うものになります。こんなことを話し合いながら今回の職場体験を終えました。弘前には薬学部がありませんので、どうしても西目屋から離れなければなりません。でも、薬剤師になった後は戻ってきて欲しいものです。



内視鏡システムを新しくしました



医学の進歩は留まるところを知りません。内視鏡検査もそのひとつです。15 年前に開業して間もなく、口から入れますが非常に細い内視鏡が出ました。細いだけで苦しさが非常に少ないと言われていたのですが、すぐに購入しました。平成 15 年にはこの機種の改良型ができましたので、これに替えました。私自身の内視鏡技術の上手さが苦しくない理由であることはもちろんですが、この細い内視鏡のお陰で、胃内視鏡検査は非常にスムーズに行えるようになりました。この頃は、「こんな検査なら、明日もう一度やってもいいですよ。」という人がたくさんいました。

平成 18 年には、全く新しい鼻から入れる細い内視鏡が開発されました。これが優れもので、嘔吐反射が少なくなり、胃内視鏡検査は非常に楽になりました。最初の頃は、鼻から入らない人もいましたが、経験例が 6,000 例を越えた現在は、鼻から入らない人は 1 ヶ月に 1 人いるかないかです。細いだけに胃の中を見る時の解析度はハイビジョンに比べると劣ります。しかし、嘔吐反射が少ないので、胃の中をゆっくり観察することができるようになりました。この結果、内視鏡検査が終わってすぐに、「これくらいなら、今日もう一度やってもいいですよ。」という人がいました。それに、右の鼻から検査をした患者さんが、「今度は左からですか？」というのには笑ってしまいます。

鼻からの内視鏡検査を行うようになって気が楽になったことがあります。それは、空気をたくさん入れて胃を大きく膨らませ、ひだの間を十分に観察できるようになったためです。「未分化型」といわれる小さくても深く進行し、見つかる前に進行してしまう胃癌があります。この癌は胃のひだの間にあることが少なくなく、ゲェゲェと反射が強い時は、観察が不十分になって見逃すことがあります。鼻から入れる内視鏡では、空気を十分にに入れてゆっくり観察できますので、安心して検査を終えることができます。

今度は、胃や大腸を NBI といわれる画像で観察できるようになりました。NBI というのは光の特性を利用して、血管の細かい状態を見るものです。癌ができると

正常とは違う血管が出てきます。私たちが見ている通常の光で見ると多少変化があるかなという微妙な所を NBI で観察すると分かりやすくなるのです。この NBI を使うために、内視鏡の光源といわれる装置を新しくしました。実際に使用する内視鏡自体はこれまでのものが使えます。

NBI を導入した主目的は、食道癌を見つけるためです。最近、胃癌や大腸癌は、早期のものであれば内視鏡や腹腔鏡で手術ができます。食道癌も早い時期で見つけると同じように処置ができますが、早期の食道癌を見つけるのがむずかしいのです。特殊な色素を使って検査をすると見つけやすいのですが、通常の検査ですべての人に使うのは無理です。そこで、NBI を使って少しでも早期の食道癌を見つけようと思っています。この観察のために、これまでよりも胃内視鏡検査の時間が長くなりました。

医療機器の進歩とともに病気の診断方法と治療方法が変わってきています。新しい医療機器が出るとすぐに変わっているのは、「より早期の癌」を診断するためです。胃癌や食道癌も「より早期の癌」であれば、大きな手術をすることなく内視鏡手術で治療を終えることができます。胃がん検診の基本的な目的は、胃癌を早く見つけることで死亡する人を少なくすることです。実際は、私たちは『外科手術』をすれば助かる早期癌を見つける努力をしています。これが今では、「より早期の癌」を見つけ、『内視鏡手術』ができる段階で診断することに目標が変わってきています。

現在、内視鏡検査はハイビジョンで観察できるようになっています。この NBI 画像は拡大内視鏡で観察するともっと正確な診断ができるのですが、今の細い内視鏡ではまだ開発されていません。近い将来、鼻から入れる細い内視鏡でも拡大した像をハイビジョン画像で観察できるようになります。皆さんは、世界でも医療水準が高く、いつでも医療機関や健診センターを受診できる環境にいます。『早過ぎる死』を迎えないために、がん検診を受けましょう。

医院でのこぼれ話 『塩もみでやせたら私に教えて！』

先日の夜、書類を書き終わって帰ろうとしたら急患が来しました。急にめまいがしてきたので、通院しているご主人に付き添われて来たとのことでした。手足の麻痺もなく、めまいがすると言いながらも笑顔で受け答えできました。

大きな病気ではないことが確認できましたので、工藤さん（75 歳女性）の大きなお腹を見ながら、

私：「りっぱなお腹ですねえ。」

工藤さん：「はい、この前、テレビでやっていたので、やせるために『塩もみ』をしているんです。」

私：「塩もみをしてやせてこれくらいの大きさですか・・・。」

塩がもったいないので、そんなの止めた方がいいと思うよ。」

工藤さん：「先生、塩もみがめまいの原因でしょうか？」

工藤さんは、やせるために塩もみを始めたのですが、それが原因でめまいが起こったと思っているらしかった。

私：「違います！」

工藤さん：「塩もみを続けてもいいかと思って・・・。」

私：「塩もみでやせたらみんなスマートになりますよ。もしやせたら教えて下さい！」

と言ったら、介助していた尾野さんが間髪を入れずに、

尾野さん：「私に！！」

尾野真紀さんは、採用した時はすらりとしていましたが、今では写真のように立派になってしまいました。来年 2 月の看護師国家試験に向けて勉強を続けていますが、背中のリュック、両手のかばん、この中は全部参考書なんです。いつもこの姿で通勤しています。仕事を終えて帰る時に玄関で一緒になってしまい、つい、持っていたカメラで撮ってしまいました。

男の子 2 児の母でもある尾野さんは、家へ帰ると落ち着いて勉強できないのでしょうか、休診の午後は 1 人で内視鏡検査室で勉強している姿を時々見かけます。きっと、仕事と勉強で忙しく、やせる暇もないのでしょうか。塩もみが効くといいのですが・・・。

